様式Ｃ-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22年　6月　18日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０１７４
研究課題名（和文）京都当道座奥村家関連資料の総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study on the Okumura Family-Related Collection of the Documents of the Blind Men's Guild in Kyoto

研究代表者
岡田　三津子（OKADA　MITSUKO）
大阪工業大学・知的財産学部・教授
研究者番号：50201984

研究成果の概要（和文）：
奥村家関連資料は、京都当通座の最後の最高責任者であった奥村允懐一（まさかねいち）の所有していた楽器・文書類を主とする資料の総称であり、現在、京都市歴史資料館に寄託されている。本研究では、奥村家関連資料の悉皆調査および正確な書誌データ収集を第一の目的とした。調査の結果、謡本として認識されていた資料が、従来未知の波多野流平曲譜本のほぼ一揃いであることが判明した。資料調査の成果をふまえ『京都当道座奥村家関連資料総目録』を作成した。

研究成果の概要（英文）：
The various documents of collection left in OKUMURA Family refers to a documentation and instruments mainly which were owned the last chief OKUMURA MASAKANEITI of the Blind Men's Guild in Kyoto. These are now deposited at Kyoto City Library of Historical Documents. In this study, we intended primarily whole study and accurate bibliographic data collection. We found that the following investigation. Manuscripts previously identified as Noh text was found to be almost a uniform suit almost of the Scores of HeiKyoku of the Hatano School which is unknown past. Based on the results of research material, we created the general list about the Okumura Family-Related Collection of the Documents of the Blind Men's Guild in Kyoto.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2007年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 2008年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2009年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 2,700,000 | 810,000 | 3,510,000 |

研究分野：文学
科研費の分科・細目：日本文学
キーワード：日本文学・当道座・奥村家・平家物語・波多野流平曲譜本・資料総目録

## １．研究開始当初の背景

古代から明治期にいたるまでの日本の盲人の歴史については、中山太郎『日本盲人史』(1934)『続日本盲人史』(1936)、加藤康昭『日本盲人社会史研究』(1974)等の優れた業績がある。当道座は、盲人の社寺等への藝能奉仕勤務および自らの生活保障機構として、鎌倉時代末には結成されたと推定されているが、その後、何段階かの変遷を経て、江戸時代には確固たる式目をもち、幕府の確かな保護を得て、組織も堅固なものであった。京都と江戸に大きな拠点をもち、日本のほとんどの盲人を組織化したものと考えられている。当道座に所属する盲人は、政治社会経済等多岐にわたっての活躍があったが、何といっても、中世以来の伝統を受け継ぎ、藝能に関わるものが大きかった。その中心は、平家物語の語り(平曲、平家琵琶)であり、その流れを汲んで発展した箏曲である。江戸期には、当道の構成員と平家琵琶の伝承者とは、合致するものではなかったようだが、この奥村允懐一は、当道座の最後の最高責任者であり、波多野流平家琵琶の最後の伝承者でもあった。その奥村家関連資料は、現在一括して京都市歴史資料館に寄託されている。

この奥村家関連資料については、特に文書に限って、その主要部分は、過去に検討がなされ、その成果は、『奥村家蔵 当道座・平家琵琶資料』(1984 年,大学堂書店)として公刊されている。当資料は影印と活字翻刻とで成っている。本書によって奥村家関連資料の価値の高さは十分に認められるものの、公刊された活字翻刻にはかなり誤りが多い点が惜しまれる。また、書誌の記述も十分とは言えない。散佚せず丁寧に保存された貴重な資料群でありながら、現在公刊されているものでその質が計られるようなことがあるとすれば、それは、文化遺産の扱い方としてまことに遺憾な出来事と言わざるを得ない。

その意味でも、今回あらためて調査をしなおし、奥村家に伝えられた資料群の全体像をとらえる必要性があると判断した。

## ２．研究の目的

本研究では、京都当道座の最後の中心人物・奥村允懐一（?～1884?）の所有していた、楽器・文書類を主とする資料すべてを整理し、その価値を検討することを目的とする。

奥村家関連資料を総合的・多面的に検討するために、京都市歴史資料館での調査活動を研究の中心に据える。調査に際しては、それぞれの資料について正確に書誌をとることを第一の目標とした。

## ３．研究方法

岡田三津子・櫻井陽子・鈴木孝庸の三名は、奥村家関連資料群の全体像を共同研究によって明らかにすることを計画した。2007 年８月に行った第１回調査において、従来「謡本」として保管されていた資料が波多野流平曲譜本であることが判明した。そこで、第２回・第３回の調査において当該資料の撮影を集中的に行った。その後、紙焼き写真を作成し、第４回調査において撮影漏れ・重複等のチェックを行い、他の平曲譜本との比較検討ができる状態に整えた。平曲譜本としての位置づけは鈴木孝庸が中心となって行った。

2008 年度には、全資料の第一次書誌デー

タカード作成を完了させた。また、未紹介の文書類・日録類の撮影を行った。

2008年８月には、平曲の家である奥村家に『平家物語』が伝来していることの意味を考えるために、『平家物語』ゆかりの寂光院伝来の『平家物語』の調査を行った。寂光院本『平家物語』は、京都における平曲伝承および当道座の問題について考えようとする際、重要な意味をもつ伝本である。「雲井本」が当道にとって重要な位置を占めることは、当道資料から知られる。現存諸本のうち、覚一本が雲井本に相当するものらしいことは既に指摘されている。覚一本の諸伝本の中で、雲井本に言及するものは少ないが、寂光院本はその奥書に雲井本と明記している。しかしながら、約50年前に簡略な書誌調査報告がなされたのみで、その全貌については不明のまま現在に至っている。書誌学・文献学の立場から寂光院本を精査し、その特質を明らかにすることを目的とした。

2009年には、新出資料である波多野流平曲譜本について、その資料的価値の位置づけを行った。研究のまとめとして、『奥村家関連資料総目録』を作成し、資料の全貌が見渡せるようにした。

## ４．研究成果

京都市歴史資料館での悉皆調査の結果、奥村家関連資料を以下の六種に分類した。

①当道関係資料（歴史的叙述、式目類）
②当道関係資料（日録類）
③平家物語
④平家琵琶演奏関係資料（譜本・指南書類）
⑤平家琵琶（銘：千鳥・相応）
⑥平家琵琶関連資料（連歌・文書類）

上記のうち、波多野流平曲譜本と平家物語はそれぞれ専用の函に納められている。当道関連の巻物もそれぞれに函に納まっている。これに対して、袋綴じの写本・文書類は四つの箱に分けて納められており、その一つは奥村家伝来の衣装箱と推測されるが、他の三箱は紙箱である。収納の基準は定かではない。京都市歴史資料館への寄託の際に便宜的に分京都市歴史資料館に寄託される際、四つの紙箱に便宜的に分けられたものと考えられる。調査結果をふまえ、目録作成のために上記の六種に分類した。その過程で、従来２種と報告されていた文書が３種存することを発見した。さらに、手つかずの状態であった日録類について大まかな分類を行った。

以上の成果を踏まえて、『奥村家関連資料総目録』を作成した。

研究方法の項にも記したが、従来「謡本」として保管されていた資料が波多野流平曲譜本であることが判明した。奥村家関連資料は、京都当道座の最後の中心人物・奥村允懐一（?～1884?）の所有していた楽器・文書類からなる資料群であり、そのなかに従来未知の平曲譜本が含まれていることの意義は大きい。江戸期には、当道の構成員と平家琵琶の伝承者とは合致するものではなかったようだが、この奥村允懐一は当道座の最後の最高責任者であり、波多野流平家琵琶の最後の伝承者でもあったからである。

３年にわたる調査を終え、貴重な資料群が散佚せず丁寧に保存されていることの意義を再認識した。

５．主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１７件）

櫻井陽子「『建礼門院右京大夫集』から『平家物語』へ」（「中世文学、５５号、2010年、98-107」査読有

櫻井陽子「『平家物語』と周辺諸作品の交響」（「軍記と語り物」46号、2010年、20-30）査読有

鈴木孝庸「当通の『妙音講縁起』－解題と翻字・翻印－」（「人文科学研究（新潟大学）」126、2010年、1-26）査読無

岡田三津子「『参考源平盛衰記』写本書誌調査報告」（「大阪工業大学研究紀要」54巻1号、2009年、79-94）査読無

岡田三津子「宴曲の芸能性と文芸性―宴曲から曲舞・謡曲へ―」（「国文学　解釈と鑑賞」2009年10月号、79-88）査読無

鈴木孝庸「祇園精舎語りの秘曲性ー付　山口県立山口図書館『小秘事』影印ー」（「人文科学研究（新潟大学）」124、2009年、1－48頁）査読無」

鈴木孝庸「平曲〈読物〉のテキストと墨譜」（「人文科学研究（新潟大学）」122、2008年、1－31頁）査読無

櫻井陽子「覚一本平家物語伝本遡行の試みー巻四「厳島御幸」「還御」をてがかりにー」（「国語と国文学」85巻11号、2008年、56－66）査読有

櫻井陽子「覚一本平家物語諸伝本の本文流動ー伝本分類の再構築ー」（「国語国文」77巻4号、2008年、1－17）査読有

岡田三津子「蓬左文庫蔵『源平盛衰記』写本再考ー書写者玄菴三級の検討を通してー」（『軍記物語の窓』第三集、泉書院、2007年、167－189頁）査読有

〔学会発表〕（計　３件）

岡田三津子「曲舞「西国下」を読む－宴曲・平家物語との関連から－」（関西軍記物語研究会第６７回例会、2009年12月13日、於：関西学院大学）

櫻井陽子「『建礼門院右京大夫集』から『平家物語』へ」（中世文学会平成２１年度春季大会、2009年5月30日、於：中央大学）

〔図書〕（計　４件）

『〈声〉とテクストの射程』（高木裕編、鈴木孝庸他１１名、2010年、349頁）

『宴曲索引』（伊藤正義監修、岡田三津子・大山範子・川島朋子・田中まき・鳥井智佳子・東野泰子、和泉書院、2009年、695頁）

『平家吟譜－宮崎文庫記念館蔵平家物語』（鈴木孝庸、村上光徳、瑞木書房、2007年、520頁）

６．研究組織

(1)研究代表者

岡田 三津子（OKADA MITSUKO）

研究者番号：50201984

(2)研究分担者

鈴木 孝庸（SUZUKI TAKATSUNE）

研究者番号：90143742

（H19：連携研究者）

櫻井 陽子（SAKURAI YOUKO）

研究者番号：60211934

（H19：連携研究者）

(3)連携研究者

以上